

京都大学若手人材海外派遣事業 ション万プログラム(職員派遣)
平成 26 年度職員長期派遣海外研修報告書

研修者氏名：飛田 絢子

研修者職名：主任

研修先：米国

研修先機関名：日米研究インスティテュート (USJI)、S&R Foundation

研修期間：平成 26 年 10 月 1 日 ～ 平成 27 年 9 月 28 日

【概要】

日米研究インスティテュート（以下、USJI）および S&R 財団において、主に米国の高等教育・日米関係に関する情報の収集・発信や、社会起業家を支援するプログラム等に携わり、収集した情報の要約作成、プログラム運営補助業務等をおこなった。加えて、米国拠点開設のための調査として、ビザ・住居手続き等のマニュアルを作成し、現地法人設立・雇用等に関する手続きについてまとめ、報告した。

研修前に所属していた部署では、学生の海外留学を促進していたが、国際化を進めるとどう発展していくのかよく理解できていないところがあった。本研修において外国に長期間滞在し、現地の日常や歴史を感じながらこれらの業務をおこなうことで、異文化に対する理解が深まり、今までとは違った角度からものを見るということを経験できた。

そしてわかったことは、国際化というのは本学のミッションを達成するための一つの行程であり、手段であるということである。では、本学のミッションを達成するためになぜ国際化が必要なのか。それは、国際化、例えば学生の海外留学、をとおして世界の様々な人々や文化等を理解することにより、新たな人間関係や発想が生まれ、本学の研究や教育が発展していくからではないかと思う。

ここで得られた自分なりの考えと経験を活かし、本学の発展に貢献したいと考えている。

【内容】

日米関係・高等教育関連情報収集、情報発信・報告

シンクタンク等において開催される、日米関係や高等教育に関連するセミナーに参加し、そこで議論のあった内容について日本語のニュースレターを作成し、情報発信、もしくはレポートにまとめて報告をおこなったりした。

トピックによっては、自身の背景知識では難しいと感じる内容のものも多かったが、講演者やパネリストが関係テーマについて記述している論文を読んで参考とするなど、できるだけテーマについて理解を深めてからレポートを作成するよう努めた。また次第に、事前に彼らの略歴や関連する動画などの資料に目を通しておくと、講演者やパネリストについての背景知識が得られるので、セミナーにおける発言の意図を理解するうえで大変役に立つことがわかってきた。また、参加するセミナー等のイベントを調べる中で、ワシントン DC では普段から大小様々な規模・主体によるセミ

ナーが数多く行われていることを知った。そして、セミナーの質疑応答時間には、必ずと言っていいほど質問する参加者がいるし、セミナー後も講演者やパネリストと話す人もいれば、参加者同士で情報交換する人たちも多くみられた。

雑誌や新聞で取り上げられている日米関係・高等教育関連トピックについて、日本語で要約を作成し、日本側への情報提供をおこなった。情報収集のために、メディアのウェブサイトに購読の登録をしたり、該当トピックを専門に取り扱っている部門のあるシンクタンクのウェブサイト等を定期的にチェックしたりしていた。該当の記事があれば、内容の重要度や話題性を勘案して、日本側へ情報提供するか決めた。要約は、長すぎず、しかし内容を伝えるものとするために、言葉遣いに注意するなど、日本語として理解しやすく、簡潔な文章になるよう努めた。

インターン学生

USJI では、インターン学生を受け入れていた。学生からのインターンシップ申請受付け、面接日程調整、面接、採否決定、結果通知・手続き等をおこなった。また、受け入れたインターン生の業務や勤務の管理をおこなった。インターン学生は留学生が多く、留学中の体験談として、課外活動や住居の話、留学プログラムの内容を聞くことができた。

米国拠点開設のための調査

拠点開設に伴って派遣される教職員に資するため、自分の経験や、本職員派遣プログラム第一回派遣者からの引継ぎ、その他の資料及び調査により、ビザ・住居・同伴家族に関するマニュアルを作成した。また、拠点の運営開始のために必要な、現地での法人設立および雇用等に関する法律や手続きを調査し、報告をおこなった。

この調査をすることにより、米国拠点設立準備のための資料を作成できたことに加え、米国内での一般的な法律体系や用語についての知見を得ることができた。

ビザ取得手続き

学内担当部署と適宜相談しながらではあるが、派遣者自身のビザ取得手続きについて、弁護士と連絡・調整をおこないながら進めた。手続きに関する全ての流れを自身でおこない、また、米国拠点開設のための調査においてもビザに関する調査をおこなったので、自身の取得ビザだけでなく、それ以外のケースについても理解することができた。

社会起業家支援に関する調査補助

S&R 財団でおこなわれている社会起業家を支援するプログラムについて、その発展や知名度向上を目的とした調査の補助をおこなった。

プログラムをより発展させるための調査は、社会起業家とその事業立ち上げ初期においてどのような環境を必要としているのか調べるためにアンケートを実施するというものであった。具体的な業務としては、社会起業家や彼らの育成プログラム等を実施している関係組織を探し、組織名や本社のある都市、事業分野、コンタクト先といった情報を収集してデータベースを作成した。また、

アンケートの内容について検討する会議に参加した。調査の過程で、想像をはるかに超えた数の起業家がいて、彼らを援助するために育成プログラムやオフィスサービスを提供している組織がたくさんあることを知った。

また、S&R 財団では、プログラムの知名度を向上させるための取り組みをおこなっていたが、その一環として、一般的によく用いられているウェブ上の広告媒体について調査をおこなった。同様のウェブ上広告サービスを提供している他業者との比較、S&R 財団における導入のメリット・デメリット、他の広告媒体に関する選択肢等について意見をまとめ、報告書を作成した。

社会起業家支援プログラム運営補助

S&R 財団のプログラムでは、主として約 5 か月間にわたり、選考された起業家（S&R 財団では“フェロー”と呼んでいる。）に住む部屋とオフィスが提供され、社会起業家に必要なスキルを身につけるためのセッションや、事業を進めるうえでのアドバイザーの紹介・相談時間、投資家とのネットワーキングの場が設けられている。そしてそれらのイベントは主に、S&R 財団オフィスの一つである、ワシントン DC の歴史的な建物で催される。この建物内は部屋の配置が複雑で、慣れていないと迷路のように感じられたので、間取り図を作成したところ、フェロー向けのオリエンテーション資料に利用された。彼らが以後この建物に住み、そこでおこなわれる様々なイベントに円滑に参加できるよう、貢献できたと思う。また、プログラム期間には、スキルセッションやそれらに伴って催される懇親会の会場準備などをして、開催補助をおこなった。

社会起業家支援プログラムへの参加

社会起業家支援プログラムに参加して、例えばインタビューに答えるための心構え、スキル、コツや、投資を獲得するためのプレゼンテーションスキルに関する話を聞くことができた。話の内容は具体的・実用的なもので非常に参考になったが、それ以上に社会起業家であるフェローの事業内容に関する話が非常に興味深かった。

イベントの際は陪席のつもりで会場の後ろの隅に座るのだが、会の最初に参加者が自己紹介することになると、陪席かどうかは関係なく発言の順番が回ってくる。最初は戸惑ったが、自分がそのイベントで発言すべき立場にあるかどうかということではなくて、「私はあやしいものではありません」ということを示すために名乗った方がよいのだというように思えてきた。そう考えると少しは落ち着いて話せるようになった。

セミナーイベント等の開催準備

ワークショップやセミナーなど様々なイベント開催補助の主なものとして、会場の事前手配や、配布資料準備、当日の会場セッティング、受付などをおこなった。これらの業務の中では、開催側がイベント会場をその建物内に保有していることの利点が非常によくわかった。イベント会場を持っていると、場所探し、会場側との日程調整、料金支払い、イベント当日の物品搬送等、会場がオフィスと離れていたり、別組織であるために生じる交渉や業務が不要で、必要な備品も会場に保管できるからである。

また、あらかじめ設定されたテーマの専門家を講師に迎え、大学生・大学院生向けにワークショップ等の形式で勉強会を開催するにあたり、学生はどのようなテーマの勉強会を期待しているのか、というニーズを把握するためのアンケートを実施した。Web上で回答できるアンケートを作成・実施して結果をまとめた。

勉強会の講師候補者と連絡を取り、日程調整や、会場確保等をおこなった。なるべく多くの学生が参加しやすいように、周辺にある大学の学年暦を調べて試験期間を把握したうえで、開催日時を決めるのに参考とした。勉強会の講義内容についての詳細が決まると、開催通知をメーリングリストに登録している学生へ送信し、加えて Facebook に掲載する等の広報をおこなった。

周辺大学見学・訪問

学生や本学出張者とともに、ワシントン DC エリアにある大学を見学・訪問した。

ジョージワシントン大学は私立の総合大学であり、フォギーボトムキャンパスはワシントン DC の中心部に位置し、交通の利便がよい。大学のキャンパスと市街地が入り混じっているため、ここからここまでがキャンパス、という境界線ははっきりとはしていない。訪問の際に、国際部署の職員より得られた話で印象深かったのは、『米国外に留学したいと考えている学生は増えているので、いかにうまく宣伝していくかだ。学生は、教員に勧められる、周りに留学生がいるという接点があれば、その国に留学する動機となる。』ということであった。

アメリカン大学も私立の総合大学であり、ワシントン DC の端に位置しているため、都市部の喧騒からは少し離れ、学生は学業に専念できる環境がある。日本からの交換留学生、学位取得課程学生も多い。

ジョージタウン大学は、伝統的なカトリックの私立大学である。ワシントン DC の中でも比較的住宅エリアにあり、重厚な建築様式の建物が多いため、厳かな雰囲気を感じられた。

ジョージメイソン大学は、国際化に熱心な印象を受けた。Global Collaborative Classroom プロジェクトという、オンラインを利用した国際的な共同授業をおこなっており、各国の大学とコンソーシアムを作ることに取り組んでいるとのことであった。

州立であるメリーランド大学を訪問し、いくつかの部署の教職員の話を聞くことができたが、米国内で大学の授業料が高騰していることもあり、経済的な理由によりコミュニティーカレッジから大学へ編入する傾向があることがわかった。

NAFSA2015 (NAFSA: The National Association of Foreign Student Advisers) への参加

期間中に開催された以下のセミナーに参加して、米国ばかりでなく、北欧やドイツ等の大学教職員による講演を聞き、大学の実務に関する有用な情報が得られた。また、本学の交流協定担当者が他大学との協定や国際教育プログラムに関しておこなったミーティングに同席した。

(参加したセミナーの講演内容)

- ・国際教育プログラム担当オフィスのマネジメント
- ・留学生リクルートのためのマーケティング

- ・海外からの留学生や研究者の同窓会ネットワーク
- ・学内において国際化を進めるための取組み
- ・国際教育をめぐる米国における政策動向
- ・学内外への国際化取組状況のアピール方法

講演の中には、国際化を進めるため、学内において国際化の重要性を理解してもらう必要性から、国際化への取組みについて興味を持ってもらうようなアピール方法についての話があった。同様の話が社会起業家の方でもあり、どうやって自分たちの事業に興味を持ってもらうか、ということ時間をかけて考えていた。大学職員と社会起業家、場所は違えど、いかにして興味を持ってもらいたい人の、つまり話を聞いてほしい人の時間を自分たちが獲得するか、また限られた時間で自分たちの情報をどう見せるか、皆、非常に熱心に取り組んでいるように感じられた。そして、聴く側も、話し手のプレゼンテーションに説得力があると感じれば興味を持ち、それが結果的に後々両者の関係に影響することがよくあるようであった。米国でプレゼンテーションが重視されているというのはこういうことか、と実感した。

JUNBA2015 (JUNBA: Japanese University Network in the Bay Area) への参加

シンポジウムでは、Provost という職務および大学のガバナンス体系、また学部・大学院の組織再編等について、カリフォルニア大学の教職員による講演があり、米国大学の組織構成や改組に関する知見が得られた。

サミット開催日には、まず文部科学省高等教育局高等教育企画課国際戦略分析官より「大学におけるガバナンス機能の強化」についての基調講演があった。続いて、あらかじめ設定された各課題について、JUNBA 加盟各大学の取組みの説明、質疑・討論がおこなわれた。各課題とは、総長・学長権限拡大、新組織の設置、人事戦略、総長・学長との意見交換の場の設定、プロボスト・副学長等の新設、教員・教育組織の関係整理といったことで、現在加盟大学で共通して今後の検討課題となっていることや、各大学の取組み・現状についての知見が得られた。

DC 京大会への参加

研修期間に開催された、DC 京大会へ参加する機会を得た。そこで強く感じたことは、同窓生の方々が“現役学生の国際化に貢献したい”という意欲をお持ちである、ということであった。

また、会でのスピーチや懇談で、「今の自分があるのは、本学の『自由の学風』があったからこそ」であるということ口々に話しておられたのが印象に残った。そして、同窓生の方々が卒業後どのように国際的なご活躍をされているのか具体的に見聞きすることができたので、今後の本学の国際化業務をおこなう上で大変参考になった。

【成果】

海外へ留学する学生や外国人学生・教職員への実体験を踏まえたサポート

海外へ留学する学生に対して、留学に伴って実際に発生する生活に関することなどの細々とした

事柄や、長期滞在に関する実体験を伴ったサポートができるようになった。また、異文化の地である海外での滞在経験は、本学に所属する外国人学生や教職員へのサポートにも有用である。

米国拠点設立に向けての知識、サポート

マニュアル作成や調査報告をおこなったので、米国拠点設立の際にサポート業務が可能である。サポートの際には、米国における高等教育関係の知識もいかすことができると思う。

各調査業務

研修期間中、米国拠点のための調査以外にも、日米関係・高等教育関係情報収集、情報発信・報告や各業務補助において、調査をおこない、必要な情報をまとめた資料を作成するという業務を数多く経験できた。この経験により、必要な情報の収集力や、資料のまとめ方のスキルが向上したので、今後の業務にいかすことができると考えている。

イベント運営

参加人数の多いもの、少ないもの、セミナーやレセプションと、様々なイベント運営を補助し、また参加したことで、開催までの準備やスムーズに会を進行するための運営業務にいかしていきたい。

多角的な視点を持って業務にあたる

本研修により、異なる文化圏での長期滞在ができ、今まで想像したことのなかった角度から物事を見ることができた。所属部署の業務に専念していると、気を付けていても、ものの見方が狭くなるときがある。今回の経験を忘れず、課題が見えた時、困難にぶつかった時だけでなく、業務の一つ一つについて幅広い視野でとらえて取り組むことを心がけ、今後も本学に貢献したい。

【所感】

海外へ中長期間留学する学生が、現地でどのような困難に直面し、また「生活する」ことに関わってどんなことを体験しているのか、自分で実体験をしたいとの想いでこのプログラムに参加した。結果として、長期滞在ならではの非常に貴重な経験を得られた。限られた期間・地域ではあるが、目的としていた生活等に関わることを体験できたし、加えて、一年を通して観察することができたからである。

予想はしていたものの、住居や生活環境の整備に関しては手探りであり、苦労するところが多かった。しかし、報告者と本プログラム第一回派遣者の経験や、その他得られた情報を加味してマニュアルを作成したので、今後に向けたノウハウ蓄積に貢献できたと考えている。

また、マニュアル以外にも成果として挙げたように、海外へ留学する学生や外国人研究者・教職員への実体験を踏まえたサポート、調査業務、拠点設立のための調査により得た知識、イベント運営と、この研修を様々な具体的業務に活かせるものと考えている。

そして、詳述した上記の研修業務をおこなうことで、米国の教育政策の動向等に関する視点や、物事に対する見方が多角化したことは、今後の一つ一つの業務への取り組み方そのものを変えることとなるという意味で、最も重要な成果であったと思う。